

本報告では、彫刻家大熊氏広(1856-1934)と林学者本多静六(1866-1953)という、共に明治政府が敷いた近代化政策における記念事業を、一方は「記念像」の建立、他方は「記念樹」の植樹というそれぞれ得意の分野で指導した二人の人物に焦点を当て、各々が理想とするところの記念物に見られる「形態」とその根底にある「思想」を比較検証することによって、これらを生み出す原動力となり得たものを追究することを一つの目的とする。近代的記念物に関する研究といえば、列強と肩を並べることが目標にネーションステーツ構築を目指していた当時の日本において、国民教化政策の一環として奨励された国家事業としてのモニュメント建立に係る考察が主流である。しかしながら、記念樹の植栽や記念並木の造成といった植樹事業もまた同様に、国家における記念事業として推進されていたという事実は、意外に知られていない。例えば造林学の指導的位置にあった帝国大学教授本多静六をはじめ、農商務省といった公的機関が「記念植樹」という行為を奨励するテキストを発行し、併せて「記念植樹」がニュースとして数多く報道されるなど、国家事業としての記念樹の植栽という行為は広く内外の日本で展開されていたのである。今回、大熊氏広と本多静六という共に近代日本を表象する記念事業に関わった二人の思想について比較を試みるということにあたっては、彼らのバックグラウンドには何かと共通する部分が見られることも理由の一つに値する。同じ埼玉県出身であり互いの年齢も近く、なお且つ本多静六の祖父にあたる折原友右衛門という人物は「不二道孝心講」という山岳信仰に基づく富士講の先達をしていたのだが、同じグループの中で相反する一派を率先していたのが大熊氏広の実兄にあたる篤農家大熊徳太郎であったという見逃せない事実もある。そこで本報告では、大熊氏広と本多静六によって残された言説に依拠しながら、彼らが行った近代日本の記念事業における実績を、それぞれの信仰・信条に照らし合わせて考察を行うことにより、その根柢に在る思想を導き出すことを試みた。

結論を要約すると、大熊氏広の芸術家としての制作態度に見られる国家へ忠誠心というのは、特に彼が敬虔なメソジスト派信者であったことから、天職を全うするという意味におけるプロテスタンティズムの奉仕精神に支えられたものであり、同時にそれは不二道の家業出精という実践道徳を拠り所とするものでもあったと考えられる。近代造林学を築いた本多静六の場合は、彼の推奨する記念植樹というのは、いわば「生命ある記念物」の植栽であり、神仏習合思想に基づく山岳信仰における樹木崇拝がそこに見られるものであった。このように大熊氏広と本多静六が生み出した近代的記念物の「かたち」というのは、生命の有無にこそ違いはあるにせよ、それを具現化した彼らの「心」のなかでは、こうした新旧混淆した思想が原動力として働いていたと考えられる。「旧習を打破し知識を世界に求める」という欧化政策に従い、西洋の流儀に沿って、近代日本の景観作りに欠かせない記念事業に携わった大熊と本多の二人ではあったが、それぞれが作り出した記念物というのは、こうした思想が反映された「近代化の象徴」といえるのではないだろうか。